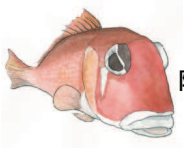


クラシック音楽の思い出



随 筆

田 中 徹 明*

Memories of Classical Music

Key Words : concert, orchestra, requiem, symphony

「随筆」の執筆を依頼されたものの、何を書けばよいのかとんと思ひ浮かばないので、子供の頃から親しんできたクラシック音楽の思い出でも書こうと考え引き受けることにした。ところが、最近、内海先生がクラシック音楽に関する内容でお書きになっているのではないかと、それも私よりはるかに深い造詣をお持ちだ。

しかしながら引き受けた以上、出来るだけ内海先生とかぶらないようにするしかないと感じを決め、クラシック音楽を聴くようになったいきさつと、これまでの人生で出会った様々なコンサートにまつわる思い出を中心に書くことにした。断っておくが、私は音楽的には素人である。また、昔のことが多く、思い違いもあるかと思うがご容赦のほどを。

さて、人生で初めていわゆるクラシック音楽に接したのは、中学生になった頃だから半世紀以上前のことである。ラジオかテレビで聞き覚えた流行歌を口ずさんでいたら、世界には名曲がいっぱいあるよと、ハンガリア舞曲、ペルシャの市場にて、禿げ山の一夜などを母に教えられたのがクラシックを聴き出したきっかけであった。思えば、父母共に音楽が好きであったが、時代が時代であっただけにゆっくり楽しむことは出来なかったようで、それに比べれば自分は幸せな時代に生まれたことを感謝すべきであろう。

父の仕事の関係で愛媛の小学校を卒業と同時に大阪に出てきた。入った中学は、1学年20クラス、千人を超えるマンモス校であり、田舎っぺには心細い日々であった。2年生になった時、同級に引っ越してきたばかりのO君がいた。彼もクラシック音楽に興味を持ち始めたばかりのようで、すぐさま意気投合し生涯の友になった。実を言うと、私の家にはステレオがなく、レコードを聴くことはできなかった。ステレオより先にレコードを買っていたわけで、もっぱらO君の家で聴いていた。彼は2年くらいしてまた遠くへ引っ越してしまい、しばらくレコードを聴けず、クラシック談義もできなくなってしまった。

余談だが、5、6年後、彼が帰阪してから現在に至るまで、一緒にコンサートに行く機会が実に多い。彼はコンサートの安価な座席取りの名人で、現在でも大変お世話になっている。

そうこうしているうちに我が家に待望のステレオがやってきた。父がかなり無理をしてくれたのだろう。このステレオ、馴染みのある人がどのくらいいるだろうか？AMチューナーが2つあり、例えばNHKの第1が右チャンネル、第2が左、あるいは朝日が右で毎日が左というふうに、二つの放送局間でステレオ放送が聴けるといふ代物だった。当然FMは入らない。FM放送の普及とともに消える運命にあつたごく短命の機種であつたのだろう。

ドーナッツ判 (EP) しか買えなかった私をはじめ手にしたLPがワルターの「運命、未完成」である。文字通りすり切れるほど聴いた。偶然見つけた第十という日本橋の小さなレコード店で購入したものである。ここはどんな新譜も2割引という大変ありがたいところであり、その後のレコードは殆どここで購入した。



* Tetsuaki TANAKA

1947年8月生
大阪大学大学院薬学研究科博士後期課程
(1978年)
現在、大阪大学 名誉教授 薬学博士
有機合成化学
TEL : 0797-81-0698
FAX : 0797-81-0698
E-mail : tt4781tt@gmail.com

高校に入った頃からマーラーやワーグナーにはまりはじめていた。前者では「復活」と「大地の歌」が特に好きであり、後者の独特の、いわゆるワーグナーサウンドには大いに魅せられた。しかし、いずれもレコードやラジオで楽しむだけであり、いつかは生演奏を聴きに行くことを夢見ていた。

高校最後の忘れられない思い出は、カラヤン—ベルリンフィルを聞くために大学入試の2日前、即ち3月1日の早朝、同級のK君と一緒に寒風吹きすさぶ難波のプレイガイドに並んだことである。何とかチケットをゲットしたものの、案の定風邪を引き、二人とも仲良く討ち死にして浪人生活もゲットしてしまった。結局、「英雄の生涯」を聴くのは浪人中ということになってしまったが、考えてみればこれが初めて足を運んだ本格的なコンサートであった。医学部に入ったK君とは何故か、学生時代は一緒にコンサートに行くことはなく、その後、遠く離れてしまった。昨年末にK君の訃報が届いたときにはただ呆然とした。彼のご冥福を祈る気持ちと同時に、懐かしくよみがえってきたのは、入試そっこのけでベルリンフィルと一緒に並んだ若い日のことであった。

大学に入学した年にフェスティバルホールでバイロイトの引っ越し講演（オケはN響）があった。演目は「ワルキューレ」と「トリスタンとイゾルデ」。チケットの売り出しは浪人中であったが、驚くほど高額でとても手が出なかった。ところが、高額すぎて売れ行きが悪かったせいか途中から人集めのための学生券が発売された。それで何とか「ワルキューレ」を手に入れた。感激したのは言うまでもない。いつか実際にバイロイトへ、の思いは募る一方であったが、未だに実現していない。

さて、阪大入学後、前述の「ワルキューレ」に続いて思い出深いコンサートはカール・リヒター指揮、ミュンヘン・バッハ管弦楽団合唱団の「マタイ受難曲」と「口短調ミサ」である。家庭教師の給料をはたいてチケットを買った。バッハ演奏の神様と言えるリヒターは惜しくも50歳前後で他界してしまったが、彼のコンサートをこれ以外に聴くチャンスがなかったのが非常に残念である。

恐らく似たような時期だったと思うが、忘れられないコンサートの一つが、ハンス・ホッターの「冬の旅」である。彼の歌声はワルキューレのヴォータ

ン役で親しんでいたが、このリサイタルは秀逸であった。その感激が忘れられず、彼のレコードを聴きながら下手なドイツ語で何度も口ずさんだものである。

当時、シンフォニーホールはまだ出来ていなかったもので、大阪の主要なコンサートは殆どがフェスティバルホールで行われていた。ここでは阪大の他学部の学生とよく行き会ったが、その中の一人が医学部のO君（O先生と呼ぶべきであろう）であり、その後、四半世紀を経て阪大病院でお世話になるとはその当時は考えもしなかった。

学年が進むにつれ多忙になり、コンサートに通うのが難しくなってきた。大学院に進んだらなおさら、と言いたいところだが、実は2年後輩のM君とこっそり研究室を抜け出して何度か通ったコンサートがある。夙川教会で定期的に行われていたテレマンアンサンブルの演奏会である。このことは先生には内緒にしていたが、私の退職パーティーでのスピーチでM君にばらされてしまった。あの頃から既に40年が過ぎたが、この演奏会のアンコールは決まって「カンタータ147番」であり、思い出はつきない。教会で聴く音楽はいいものである。当時、若き延原氏が率いるテレマンアンサンブルはその後、日本テレマン協会へと発展し、活発な活動を続けている。まさに隔世の感がある。ただ、この教会は阪神大震災で大きなダメージを受けたようで残念でならない。

職員になってから、実はあまりこれといった思い出がない、というより思い出せないのだが……。ひとつ、テキサス大学（Austin）への留学時の思い出について記す。それでも30年前のことである。この大学、全米で五指に入る規模を誇り、芸術関係学部も充実している。Performing Art Centerという3階まで客席がある大きなホールがあるかと思えば、かなり大きな教会まである。この教会で「モーツァルトのレクイエム」を聴いた。偶然ポスターを見つけて仕事をさぼり飛んでいったのだが、感激しながら聴いていた。大学の中でこんな演奏会が、しかも無料で開催されているとは何とすばらしいことであろう。

レクイエムと言えば……。数あるクラシック音楽の中で、最も好きな曲の一つ挙げよと言われたら、私は「フォーレのレクイエム」を挙げる。もちろん

他に大好きな曲はいくつもあるが、あえて選べばの話である。古いレコードを1枚だけ持っていたが、その後、市販されているCDはすべて買いあさった。誰かが自分の葬式ではこの曲を流してくれ、と言ったそうだが分かる気がする。比較的最近、といっても10年は経っていると思うが、モーツァルトとフォーレのレクイエム2本立ての演奏会を聴きにいった。まさに涎の出るようなプログラムであり、至福の時を過ごしたものである。

私はコンサートを選ぶとき、演奏者よりも曲目で選ぶことが多い。ウィーンフィルやベルリンフィルなどは経済的な事もあり、前述のO君が一番安い席を手に入れてくれたときしか行かない。それよりも減多に聴けない大曲を生で聴くことをずっと楽しみにしてきた。その一つが前述の「復活」である。この曲を演奏会で聴いたのは比較的最近である。今は亡き朝比奈氏の指揮する大フィルの演奏をシンフォニーホールで聴いた。ご存知の方も多いことと思うが、この曲、バンダ（舞台裏に配置する楽団）を必要とし、ソプラノ、アルトのソロ及び合唱がつく5楽章からなる長大な交響曲である。その後、現在の大フィルの桂冠指揮者になった大植氏の就任演奏会もこの曲であり、やはりシンフォニーホールで聴いたが、この曲にはこのホールでも小さすぎると感じた。昨年、新装後のフェスティバルホールでこの曲を同じ指揮者、オーケストラで聴くことができ大いに満足したものだ。

この四月には、フェスティバルホールで交響詩「アルプス交響曲」を聴いた。50年来念願のコンサートであった。またしても大植氏と大フィルのコンビである。この曲は前述の「復活」などと同様、バンダを備える大オーケストラを必要とする。大植氏はこのような大作に精力的に取り組んでくれるので大変ありがたい。この交響詩、高校の音楽の時間にレコード鑑賞ではじめて聴いた曲で、登山の一日を描写したものである。途中の情景が目浮かぶようであり、特に嵐の描写の凄まじさは筆舌に尽くし難い。大ホールで大オーケストラの演奏に圧倒された。

ミーハー的に大オーケストラの演奏会を好む一方で、室内楽の演奏会にもよく足を運んだ。ピアノ三重奏曲「偉大な芸術家の思い出」は大好きで、近場でいろいろな演奏会を探しては聴きに行った。残念なのは、アルゲリッチ、クレーメルおよびマイスキ

ーによる演奏会を聴けなかったことで、泣く泣くライブ録音のCDを購入しただけである。未だに残念でしようがない。その他「アメリカ」、「死と乙女」などの弦楽四重奏もすばらしい。スメタナ四重奏団の演奏は忘れられない名演であった。

また、いつも楽しみにしている曲が「マタイ受難曲」である。前述のリヒターに始まりこれまで何度か演奏会に行ってきたが、いつも感激している。特に5年に一度来日するライブツィッヒ聖トーマス教会合唱団・ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏は楽しみである。また、鈴木氏が率いるBCJ（バッハ・コレギウム・ジャパン）も本場に劣らぬすばらしい演奏を聴かせてくれる。日本でこれほど質の高いバッハ演奏を聴けるのは幸せという他ない。

他にも、器楽、オペラを含む声楽など多くを聴いてきた。「第九」などは何回ホールに通ったか覚えていないが、一方で未だライブを聴いたことがないのが「魔王」である。短い曲だが、これほどドラマチックな曲はない。

実は、最近、楽しみに通っているコンサートがある。理学部名誉教授の荻原先生がお世話されているワンコイン市民コンサートである。新装になった大阪大学会館（旧イ号館）で月1回開催されているコンサートであり、毎回プロの実力者がすばらしい演奏を聴かせてくれる。ここには1920年製のベーゼンドルファーが入っているのでこの伴奏で「魔王」を聴かせてくれないか密かに期待している。このコンサート、ワンコイン（500円）で本格的な演奏を気楽に楽しめる。座席は毎回余裕があるようなので、この駄文を読まれた方でクラシック音楽に興味をお持ちの方は是非お出かけいただきたい。

最後に・・・、一度だけチケットを手にしなから行けなかったコンサートがある。レニングラードバレーの「白鳥の湖」である。犬養先生の万葉旅行と重なってしまったためだが、代わりに母に行ってもらった。母は大いに満足したようで、クラシック音楽を私に教えてくれた母へのささやかな恩返しになったのではないかと勝手に思っている。この駄文を書きながらつくづく思ったのは、もし私にクラシック音楽鑑賞という趣味がなかったら、自分の人生は一体どんなに味気ないものになっていたろうということである。改めて導いてくれた母と友人達に感謝しつつペンを置くことにする。